

## 2019年3月17日（日）エリアフ・インバル指揮 都響スペシャルのご案内

都響桂冠指揮者エリアフ・インバルは、2008年4月から2014年3月まで、6年間にわたり、プリンシパル・コンダクターを務めるなど、都響との深い関係は日本のクラシック・ファンには周知のところであり、特にプリンシパルの期間においてこのコンビが成し遂げた、マーラーをはじめとする極めて高水準の名演の数々は、多くのライブCDによって全国的にも知られ、単に日本のオーケストラ演奏史の金字塔というだけでなく、世界の超一流オーケストラにも全くひけを取らない評価を勝ち得ています。

そしてマーラー、ショスタコーヴィチと並んでブルックナーは、インバルの最重要レパートリーの一つです。特にインバルはこれまで、1980年代に至るまで全く顧みられることのなかった、3番、4判、8番の「初稿」（ノヴァーク第1稿）の初録音者として、これらの初稿の紹介に大きな役割を果たしてきました。インバルはこれら初稿のスコアを初めて見たときのことを、「これほどワイルドで、アヴァンギャルドで、斬新なブルックナーは全く予想していませんでした。」と語っていますが、彼のブルックナー解釈も、このイメージを反映し、例えば朝比奈隆に代表されるような、泰然として朴訥なイメージとは正反対の、極めてシャープで、先鋭的な響きに満ちたものでした。都響とは2010年3月に8番を取り上げており、CD化されていますが、これも初稿でした。

ところが今回、インバルが初めて8番の第2稿（通常演奏されている版）を取り上げます。4番については、既に2015年3月に都響と第2稿を演奏し、普段聴き慣れているのと同じ音楽とはとても思えない、強靱にして巨大、かつ聴衆を覚醒させるような革新的な響きで圧倒しました（これもCD化されています）。今回の8番でも、齢83にしますます強大なエネルギーを放つインバルと、そのエネルギーを受け止めてインバルとの共演時には普段より一回りも二回りも巨大で強靱な響きを作り出す都響が、伝統的で耳慣れた響きを一新し、これまで我々が接したことのない、全く新しい革命的な8番第2稿像を打ち立ててくれるでしょう。疑いなく2018年度最大の音楽的体験になるはずです。しかも1回だけの都響スペシャル！お聴き逃しになりませんよう！

（都響倶楽部副代表 山本憲光）